

粕屋町文化財調査報告書第 46 集

戸原伊賀遺跡第 1 地点

2019

粕屋町教育委員会

はじめに

本書は、共同住宅建築工事に伴い、平成 29 年度に粕屋町教育委員会が実施した、粕屋町戸原東二丁目に所在する戸原伊賀遺跡第 1 地点の記録です。

調査地周辺は古代の遺跡が多く存在し、縄文時代から弥生時代にかけての過渡期の遺跡である江辻遺跡をはじめ、粕屋平野で古い様相を示す前方後円墳である戸原王塚古墳、豪族居宅の可能性のある戸原寺田遺跡や戸原御堂の原遺跡などの遺跡が周囲にあります。また、約 1200 年の永きに亘る伝統が残る伊賀業師堂が調査地の南東約 150m に位置し、調査地周辺は古代から非常に栄えた地域であったことがうかがわれます。

このような立地環境のもと、本遺跡の調査で縄文時代の竪穴住居をはじめ、祭祀に関連する遺構を検出できたことは、この地域の評価を考える上で非常に重要であったと思われれます。また、古墳時代の住居とともに、古墳の可能性のある遺構を発見でき、粕屋町の歴史解明の一助になると考えられます。本書が郷土の歴史に誇りを持ち、文化財に対する理解を深める上で広く活用されるとともに、研究資料としても貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただきました関係者の方々をはじめ、近隣住民の皆様にも心から謝意を表します。

平成 31 年 3 月 29 日
粕屋町教育委員会
教育長 西村 久朝

01 経過・位置と環境

- 01 調査に至る経過
- 01 調査体制
- 01 地理的・歴史的環境

02 調査成果

- 02 調査概要
- 02 旧石器・縄文時代
- 02 遺構
- 06 遺物
- 13 小結

14 古墳時代

- 14 遺構
- 17 遺物
- 19 小結

20 古代・中世

- 20 遺構
- 20 遺物

22 おわりに

23 図版

周辺の調査遺跡

- 戸原堀ノ内遺跡 『戸原堀ノ内遺跡』福岡県教育委員会 1993
- 戸原堀ノ内遺跡第 2 地点 『戸原堀ノ内遺跡第 2 地点』粕屋町教育委員会 2007
- 戸原王塚古墳 『戸原王塚古墳』粕屋町教育委員会 2006
- 戸原御堂の原遺跡 『戸原御堂の原遺跡』粕屋町教育委員会 2000
- 戸原寺田遺跡 『戸原寺田遺跡』粕屋町教育委員会 2018

特別調査事業

- 伊賀業師堂『伊賀業師堂の歴史』粕屋町教育委員会 2009

| | |
|-----------|------------------------------------|
| 発行 | 粕屋町教育委員会 |
| 調査起因 | 共同住宅建築工事 |
| 現地調査 | 平成 29 年 8 月 28 日～平成 29 年 11 月 29 日 |
| 整理調査 | 平成 30 年 5 月 1 日～平成 31 年 3 月 29 日 |
| 使用方位 | 国土地理院 II 系(世界測地系) |
| 遺構 / 遺物実測 | 福島日出海、朝原泰介 |
| 遺構 / 遺物撮影 | 高橋幸作、朝原泰介 |
| 執筆 | 福島日出海、朝原泰介 |
| 製図 / 編集 | 高橋幸作 |

本書に関わる遺物・記録類は、粕屋町立歴史資料館にて収蔵・管理し、公開する予定である。

経過・位置と環境

調査地南東側には6世紀後半を中心とする官衙、或いは豪族居宅の可能性を有する戸原寺田遺跡、6世紀から11世紀にかけての倉庫跡が検出された戸原御堂の原遺跡が位置する。また、多々良川を挟んだ北東側には縄文時代晩期から弥生時代初期の集落関連遺跡である江辻遺跡が確認されている。



第1図 戸原伊賀遺跡第1地点周辺図(1/25000)

1. 戸原伊賀遺跡第1地点
2. 戸原寺田遺跡
3. 戸原御堂の原遺跡
4. 戸原堀/内遺跡
5. 戸原王塚古墳
6. 伊賀葉師堂
7. 江辻遺跡第1地点
8. 江辻遺跡第2地点
9. 江辻遺跡第3地点
10. 江辻遺跡第4地点
11. 江辻遺跡第5地点
12. 江辻遺跡第6地点
13. 江辻遺跡第7地点
14. 江辻遺跡第8地点
15. 江辻遺跡第9地点

地理的・歴史的環境

福岡県糟屋郡粕屋町は、福岡市の東に隣接し、粕屋平野の中央に位置している。町域は14.13km²と小さく平坦な地形である。

粕屋平野の西は博多湾に面し、南側は太宰府市の四王寺山系から伸びる月隈丘陵によって福岡平野と区分される。東側の三郡山系、大嶋山系を源とする3本の河川が平野を貫流し、北から多々良川、須恵川、宇美川の順で博多湾へ注いでいるが、山地から舌状に派生する丘陵が多く伸びているため、沖積地は河川流域に限られている。また、平野の北側には立花山系があり、博多湾に面して周りを山地で囲まれた小さな平野である。

戸原伊賀遺跡第1地点周辺は、多々良川を挟んだ北東側の対岸内陸部に江辻遺跡が所在する。縄文時代晩期から弥生時代早期にかけての遺跡であり、松菊里型住居が見えられ、縄文時代から弥生時代への過渡期の解明に大きく寄与する遺跡として重要である。

本遺跡の南約200mの地点には豪族居宅や官衙的性格が想定できる戸原寺田遺跡が所在する。6世紀末から7世紀前葉の畿内関連遺構や祭祀遺構、区画溝などが検出されている。区画溝からは紡織に関係する遺物である木製品(杵)が出土している。その南約80mの地点には同時期の戸原御堂の原遺跡が位置する。倉庫群や独立建物跡が確認されており、両遺跡は関連が想定される。

また、本遺跡の南約150mの位置に開基1200年と伝承の残る伊賀葉師堂(東願寺)が所在する。延暦二十四(805)年に益澄が薬師如来像を安置したと山本院縁起書で伝承されている。開基当初は諸堂、僧坊を備えた大伽藍であったと伝えられる。

戸原伊賀遺跡第1地点周辺は古代より連続と遺跡が確認できる地域であり、歴史解明の鍵を握っていると考えられる。

調査に至る経過

戸原伊賀遺跡第1地点は、福岡県糟屋郡粕屋町戸原東二丁目40-2において、共同住宅建築工事が計画されたことに起因する。

平成29年5月12日に、中村静香氏より粕屋町教育委員会へ埋蔵文化財事前審査願書が提出された。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である戸原寺田遺跡の近隣に位置する旨を回答し、平成29年6月12日に試掘調査を実施したところ、包含層を検出し、包含層の下から溝状遺構や土坑を確認した。この結果をもとに協議を重ねたが、工法計画の変更は難しく、記録保存の発掘調査を実施し、調査終了後に工事着手することとなった。

発掘調査は平成29年8月28日から平成29年11月29日の期間において実施した。報告書作成に係る出土遺物整理作業は、平成30年5月1日から平成31年3月29日の期間において実施した。

出土遺物及び図面・写真等の記録類は粕屋町立歴史資料館にて保管している。

調査体制

平成29年度(調査)

調査主体 粕屋町教育委員会

教育長 西村久朝

社会教育課長 新宅信久

社会教育課文化財係主幹 西垣彰博

同係主事 高橋幸作

同係嘱託職員

朝原泰介、福島日出海(調査担当)

毛利須寿代

平成30年度(報告書作成)

調査主体 粕屋町教育委員会

教育長 西村久朝

社会教育課長 新宅信久

社会教育課文化財係主幹 西垣彰博

同係主事 高橋幸作

同係嘱託職員

朝原泰介、福島日出海(報告書担当)

毛利須寿代

調査成果

調査区東側は縄文時代後期前葉頃の集落関連遺構が存在し、竪穴建物や2本柱を1単位とする構造物の柱穴等の検出とともに、後期阿高系と磨消縄文系(中津式・福田KⅡ式)縄文土器の共伴が確認された。加えて、福岡県内最古の可能性のある土偶の検出は特記されよう。調査区西側では6世紀後半の円墳が、7世紀前半期の溝状遺構に破壊されている状況が確認された。溝状遺構は単独ではなく道路状遺構に伴う掘溝の可能性が高く、道路の構築によって古墳が破壊されたものと考えられる。



第2図 戸原伊賀跡第1地点全体図(1/200)

調査概要(第2図)

今回の調査では旧石器時代の遺物をはじめ縄文時代後期の竪穴建物1軒、柱穴状を含む土坑13基、古墳時代の竪穴建物3軒、古墳1基、道路状遺構の側溝と判断される溝状遺構1条、中世の遺構等が検出された。

旧石器・縄文時代

遺構

竪穴建物(第3図)

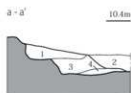
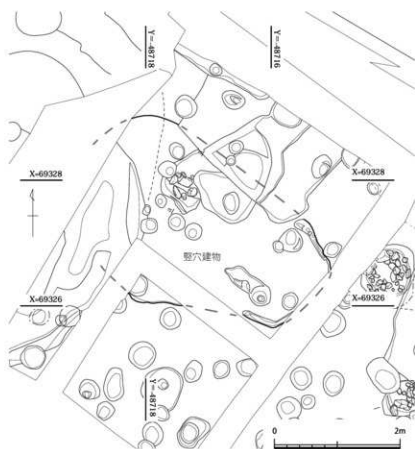
削平が著しく壁面は全て失われており

平面形の確認及び柱穴の特定が出来ない。中央北西寄りには石組が、東側壁面の一部に幅10cm、深さ5cmほどの周壁溝が確認される。規模は長さ4.3m以上、幅2.7mを測る。石組は他の遺構に切れ目判然としなが長さ1m以上、幅82cmほどの規模となるうか。炉石の部分は中央に30×40cmの扁平な円礫を平坦に据え、その周囲に30cmほどの円礫を配して円形に囲い、隙間に20cmほどの小ぶりな円礫を充填する。なお、北側には炉石の抜き取り痕と考えられる小穴が3ヶ所に並ぶことから石組部分は径50cmほどと推定する。断面観察から炉石全体の構造は、南側に1段のテラスを設けた楕円形の長い掘り込みを設け、4・3層を埋め戻した後には石を配置する。次に、1層部分の土を盛り固めながら周囲に石を配し、外側に土

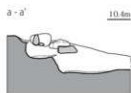
を盛り固め完成となる。なお、石組みの北側は傾斜して深さ15cmほどの土坑部分につながっており、炭化物や焼土で満たされていたが、灰などを掻き出し火種をたくわえておくような部分であったと考えられる。なお、炉石の使用礫は緑色や青色を基本とする円礫(円形・扁平・棒状)で風化が進まない硬いものを使用している。道路内堆積土(砂礫層)中の円礫は褐色系の風化が進んだ軟質礫で両者の差は大きく、前者は生活等のため、近くの河川より持ち込まれたものと推定する。

第1号土坑(第4図)

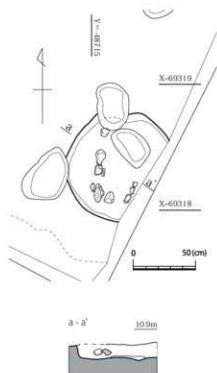
一部調査区外となるが、平面形は円形状を呈し長さ86cm、幅64cm以上、深さ10cmを測る。南側を中心に馬蹄形状に10cm大の小円礫が配され、底部



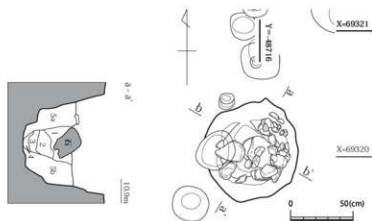
1. にぶい黄色土 (2.5Y6/4) 硬くしまる。5cmの円礫を数個含む。暗灰黄色土 (2.5Y4/2) をブロック状に含む。
2. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 炭化物、焼土を多く含む。
3. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 硬くしまる。
4. 黄褐色土 (2.5Y5/3) 硬くしまる。



第3図 竪穴建物平面図 (1/60)、石相炉平面図、土層図、断面図 (1/30)



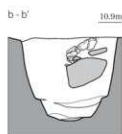
第4図 第1号土坑平面図、断面図 (1/30)



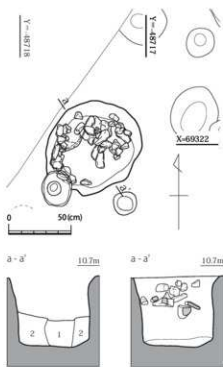
1.5a と 2 の混合層

2. 褐色粘質土 (7.5YR3/4) に少量の黒褐色粘質土 (10YR3/1) を含む。土層は含まない。
3. 暗褐色粘質土 (7.5YR3/4) 2 の土色に黒褐色粘質土 (10YR3/1) の量が増え、くすんでいる。土器片を含む。
4. 黒褐色粘質土 (7.5YR3/2) 5a の土層と近似。
- 5a. 黒褐色粘質土 (7.5YR2/2) 2~3cmの礫を少量含む
- 5b. 黒褐色粘質土 (7.5YR2/2) 10cm以下の礫と少量の砂粒を含む。

※ 1~4 は柱痕の埋土



第5図 第2号土坑平面図、土層図、断面図 (1/30)



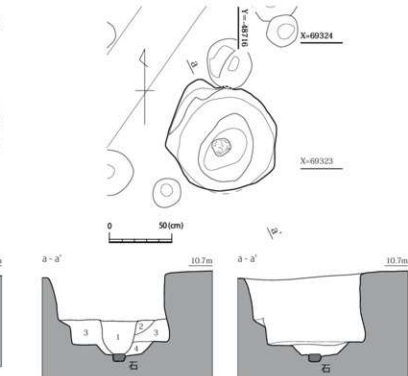
1. 柱痕 暗褐色土(7.5YR3/3) 2層よりやや軟質。
2. 暗褐色粘質土(7.5YR3/3) しまり強い。縄文土器片出土。0.5cm程の橙色(7.5YR6/8)の礫を少量含む。

第6図 第3号土坑平面図、土層図、断面図(1/30)

北側には長さ35cm、幅22cmの楕円形物の窪みが位置する。

第2号土坑(第5図)

平面形は径75cmほどの円形状を呈し、下方は2段状に掘り込まれ、深さ60cmを測る。遺構内には20×30cm、厚さ20cmの大型円礫が据えられ、その上に5～20cmほどの円礫が縄文土器片を混入した状態で堆積し、全体に遺構の中心部に向かって傾斜する。大小の円礫は石組が同様に河川より持ち込まれたもの(以下、河川礫と記す。)で、断面を観察すると大型河川礫の下に1～5層の堆積土を確認した。1～4層は径30cm、深さ37cm、最深部径10cmと細くなる丸杭状の柱痕を示し5(a・b)層は柱を固定するための埋土である。さらに、1～4層の堆積土は柱を抜いた後に周囲や上方からの崩落や流れ込みの堆積土と判断した。柱痕上部を塞ぐ大型河川礫は下部が柱痕内に深く落ち込むことから、柱を抜いた穴の空間を含め全体を塞ぐために据えられたと考



1. 柱痕 暗赤褐色土(5YR3/3)硬質でしまりが強い。内部に多くの1～2cmの円礫を含む。礫は橙色(7.5YR6/8)が多く、次に変成岩系。
2. 灰褐色土(5YR4/1)硬質でしまりが強い。1cm未満の橙色(7.5YR6/8)の礫を少量含む。層の底部に縄文土器片を2片含む。
3. 暗褐色土(7.5YR3/3)硬質でしまりが強い。細い橙色(7.5YR6/8)の礫を少量含む。
4. 暗褐色粘質土(7.5YR3/3)やや軟質。3cm程の変成岩系礫、橙色(7.5YR6/8)の礫を多く含む。

第7図 第4号土坑平面図、土層図、断面図(1/30)

えられる。その大型河川礫の上部に接して不明の土製遺物(141)が検出され、上層の河川礫群が大型河川礫全体を覆うことから、まず、直径30cmの丸杭状大柱を抜き取るため、掘方内の埋土を底部から40cmを残した深さまで取り除いた後に柱を抜き取る。次に、抜き取った柱穴を大型河川礫で塞ぎ、その横に土製遺物を置いた後、土器片の混在した河川礫で全体を埋め戻すもので、全体が祭祀行為をもって進められた状況が観察される。

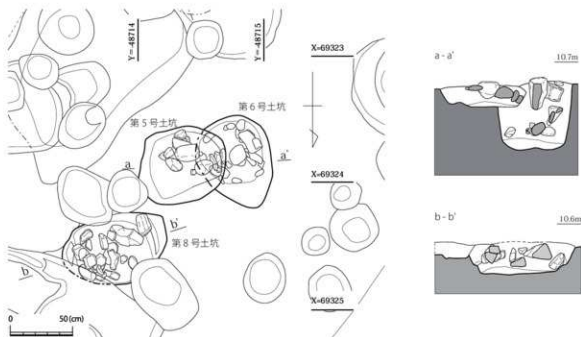
第3号土坑(第6図)

平面形は南北にやや長い楕円形状を呈し断面形は方形の1段掘り込みで長さ82cm、幅68cm、深さ55cmを測る。5～15cmの河川礫は遺構内の東側を除いて取り巻くように存在し、中央付近に直径20～25cmの河川礫が存在しない円形部分があって、その周囲にやや大型の棒状礫が縦方向で垂直に張り付く状況が観察される。礫群下の断面観察により2層の堆積土が確認されたが、2号土坑

と同様1層は直径22cm、深さ20cm、最深部径17cmと先端が若干細くなる柱痕の堆積土で、直径22cm程度の丸杭状柱が納められ、両脇の2層は柱の埋土と判断した。なお、上層堆積の河川礫中央にある円形空白部と柱痕位置が重なり、その周囲を棒状礫が取り巻くように貼り付く状況から、礫群は柱の根固め石で中心部に乱れや落ち込む礫がないなど柱が抜かれずにそのままの状態で遺棄されたと考えられ、柱が抜き取られた第2号土坑とは異なる点を指摘しておく。

第4号土坑(第7図)

平面形は径85～95cmの円形状を呈し、底部中央が2段に掘り込まれ深さ64cmを測る。断面を観察すると上部から深さ35cmまで礫を含まない埋土があり、その下に1～4層の堆積土を確認した。1層は径30cm、深さ26cm、最深部の径8cmと細くなる丸杭状の柱痕の棒状礫が縦方向で垂直に張り付くための埋土である。また、柱痕下部には15cm四方で厚さ5cmの垂角礫を平坦



第8図 第5号・第6号・第8号土坑平面図、断面図(1/30)

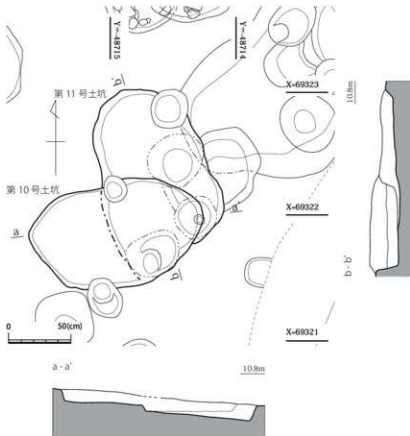
に据え、柱の沈下を防ぐ礎状とする。土層を観察すると1層は1~2cmの小礫をかなり含み、2~4層や上部の埋土とは異なっており、柱を抜き取った後の空洞化した柱痕を埋め戻した土と解釈される。抜き取りの順序は掘方の埋土を底部から26cmを残した深さまで取り除いて柱自体を抜き取る。次に、抜き取った後の柱痕に小礫混じりの土を入れて埋めた後、掘方全体に土を埋め戻したもので、河川礫を用いない点や柱の抜き取りやその後の処理など、柱の直径や丸杭状の形状を見ても、第2号土坑とよく一致する。

第5号土坑(第8図)

平面形は隅丸方形形状を呈し、長さ68cm、幅60cm、深さ15cmを測る。第6号土坑を大きく切っていて、内部の中心付近に5~20cmの河川礫が集中する。

第6号土坑(第8図)

平面形は円形を基本とするが、上端のラインが北側に大きく張り出し、断面形は方形の1段掘り込みで長さ75cm、幅60cm、深さ55cmを測る。内部は5~20cmの河川礫を底部ラインに沿うように円形に配置するが、南側には円形に大きな礫の小配列が観察され礫のない約20cm四方の空間が存在する。その内側の周囲に棒状物が縦方向に張り付いていて第3号土坑と同様に柱の根固



第9図 第10号・第11号土坑平面図、断面図(1/30)

め石と解され、直径20cm以上の柱が抜かれずに遺棄されたものとして遺構の規模も含め両者は極めて近似する。なお、遺物の項で触れるが第3号・第6号土坑出土の縄文土器片が互いに接合しており、両者は関係深く緊密で柱穴としてのセット関係にあったと考えられる。

第8号土坑(第8図)

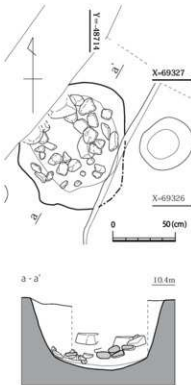
平面形は楕円形を呈し、長さ85cm、幅55cm、深さ25cmを測る。内部には5~30cmの河川礫が見られるが、周囲にやや大きいものを配した中に10cm前後の礫が集中する傾向にある。

第10号・第11号土坑(第9図)

平面形は共に横円形状で底部がほぼ平面をなし、第10号が第11号を大きく切っており、第11号→第10号という前後関係を示す。第10号は長さ1.4m、幅85cm、深さ10cmを測る。第11号は長さ1.35m、幅90cm、深さ13cmを測る。

第13号土坑(第10図)

平面形は横造物に切れ、判然としないが、隅丸方形状で長さ1m、幅84cm、深さ56cmを測る。当遺構は偶然にも古墳時代の第2号型六住居層際の土坑と重なっているため、遺構本来の上部形態や規模については不確実である。内部の下半から底部にかけて5~20cmの持込んだ河川礫が集中しており、中央部に直径20cmほどの空間があり周囲を礫群が取り巻く。その状況は第3号・第6号土坑と同様に柱穴とも考え



第10図 第13号土坑平面図、断面図(1/30)

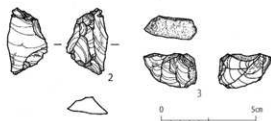
られるが、礫群の堆積状況が平坦で、柱の根固め石のような垂直気味のものもなく、第5号・第8号土坑内の状況に近い。

遺物

旧石器(第11図)

1 サマカイト製ナイフ形石器で長さ3.1cm、幅1.5cm、厚さ6mmを測る。素材の横長剥片右側縁部を刃部とし、それ以外の周囲に二次加工が施され、二側縁加工の切出し状とする。末端部には表裏両面の両側縁より平坦剥離状のやや粗い加工が施される。なお、粗い二次加工や風化度合いは旧石器と断定するには疑問が残る。2 黒曜石(漆黒)整ナイフ形、あるいは台形石器で長さ3.6cm、幅2cm、厚さ1cmを測る。素材の縦長剥片厚みが残り、背面に2条の縦長剥片剥離状が残る。当素材の右側縁部全体を刃部とし、左側縁に粗く加工を施した後上下両端より細かな二次加工が施される。裏面も同様に中央は粗く上下両端はやや細かく加工する。3 黒曜石(漆黒)製細石核のブランクで、長さ1.8cm、幅2.8cm、厚さ1cmを測る。半船底状の原石を利用し、表裏両面の自然面をフラットな上面から幅広縦長状に加工される。おそらく、次段階として上面の自然面をスポール状に割ぎ取る打面調整により、作業面が形成される。その後右側縁の自然面を除去すれば連続的に細石刃が得られよう。

以上、3点は何れも縄文時代の遺構や古墳時代以降の包含層に含まれており、本来の位置から遊離したものである。何れも北側に傾斜する緩斜面から得られており、本来は調査区の南側に存在した可能性があらう。



第11図 旧石器実測図(1/2)

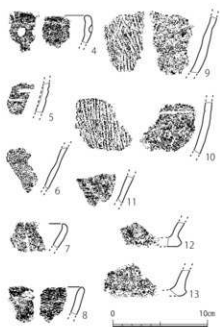
縄文土器

第1号土坑(第12図)

4 深鉢の口縁部片で口唇内面が若干突出する。口縁部の上下2段に凹点文が付され、内面には強い横ナデが施される。5 深鉢胴部片で施文は上下2段に短い沈線文が見られる。6 深鉢の胴部片で器壁は薄く内面は丁寧な横ナデが加えられ、上下2段に細く締りのある縄文(LR)が縦位に施される。上段縄文の上下2段に浅い沈線が付され、区画とする。7 粗製深鉢の口縁部片で口唇が内側に突出する。8 粗製深鉢の口縁部片で直線的にやや開く。9 粗製深鉢の胴部片で二枚貝の条痕文(斜位→縦位)が施される。10 粗製深鉢の胴部片で二枚貝条痕が施され、内面上部に1条の沈線文が付される。11 粗製深鉢の胴部片で巻貝条痕が施される。12・13ともに粗製深鉢の底部片で底部外面に指オササが施される。

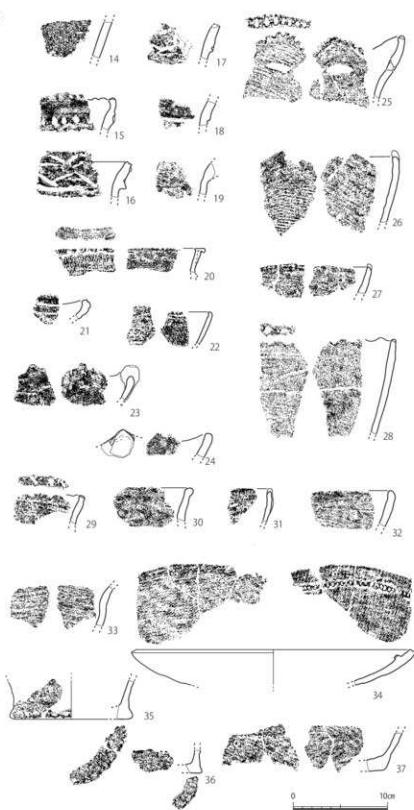
第2号土坑(第13図)

14 深鉢の胴部片で、施文は見られず色調にはふいふ赤褐色で胎土に消石を含み表面が滑らかである。15 深鉢の口縁部片で内面上部が大きくへこみ、口唇部に斜位のキザミメが加えられる。口縁部には1条の幅広突帯が付され、縦位の大きなキザミメが施される。16 深鉢の口縁部片で肥厚し外反する口縁部の上下2段に突帯状の粘土紐が貼り付けられる。その上に短い沈線で連続的に山形状のキザミメが施される。17 深鉢の口縁部片で肥厚し、外反する口縁部下方に短い沈線で連続的に山形状のキザミメが施される。18 深鉢の口縁部片で肥厚する口縁部下に1条の沈線が付される。19 深鉢の口縁部片で口縁部が肥厚する。20 鉢の口縁部片でT字形の平坦口縁で外反気味となり口縁下部には突帯が付されていたと考えられる。外面は横位にミガキ状のラインが観察され内面は丁寧なナデと見られる。器形が特殊で、阿高式古段階や阿高日式の資料(註1)に近いが時期差があり、詳細は不明である。21 波状口縁の精製深鉢口縁部片で口縁部のラインに沿って3条の沈線が付され、その間に縄文を充填する磨消縄文系の土器である。22 深鉢の口縁部片で口唇内面は突出する。器壁厚は5mmと薄手で内外両面にナデによる丁寧な仕上げを施



第12図 第1号土坑出土土器実測図 (1/4)

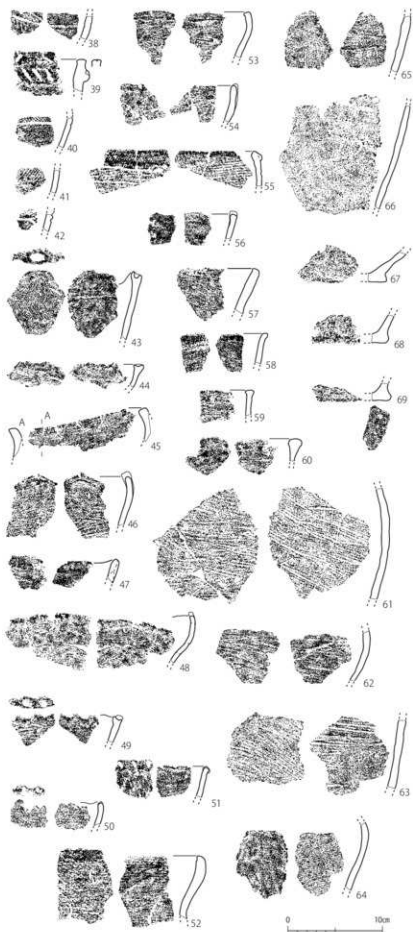
す。23 波状口縁粗製深鉢の口縁部片で頂部が渦巻き状を呈す (図23)。24 波状口縁粗製深鉢の口縁部片で頂部より下方に向かってハの字状に比喩が付される。25 波状口縁粗製深鉢の口縁部片で口唇部内面が肥厚する。口縁部下方には長さ2.3cm、幅7mmの横長楕円状の孔があり、口唇部にはやや粗いキザミメが施され、鋸歯状を呈す。調整は外面に横位の巻貝条痕、内面には巻貝条痕の後、ナデが施される。26 波状口縁粗製深鉢の口縁部片で口唇部が若干肥厚する。調整は2枚貝により外面に横位の、内面には斜位の条痕が施される。27 わずかに波状を呈す粗製深鉢の口縁部片で調整は内外両面に巻貝の浅い条痕が施されるが、上部面はへら状のものでかき取られた状況である。28 粗製深鉢の口縁部片で、口唇部に幅広いキザミメが付され、調整は内外両面に巻貝条痕が施される。29 粗製深鉢の口縁部片で口唇部に約1cm間隔で斜位のキザミメが施される。調整は外面に巻貝条痕、内面には指頭によるナデが施される。30 粗製深鉢の口縁部片で口唇部が肥厚し丸味を帯びる。調整は外面にナデ、内面には巻貝条痕が施される。31 わずかに波状を呈す粗製深鉢の口縁部片で、調整は内外両面に巻貝条痕が施される。32 粗製深鉢の口縁部片で調整は内外両面に巻貝条痕が施される。33 緩やかなSの字を描く粗製深鉢の胴部片で調整は内外両面に巻貝条痕が施



第13図 第2号土坑出土土器実測図 (1/4)

される。34 浅鉢の口縁部片で復元口径30cm、現高3.7cm、器壁厚5～8mmを測る。器形は浅い皿状を呈し、口縁部内面に幅6mmの突帯が貼り付けられキザミメが施される。調整は内外両面に指頭によるオサエやナデが施される。35

粗製深鉢の底部片で端部に指頭によるオサエが連続する。36 粗製深鉢の底部片で、底面に指頭によるオサエが連続する。37 粗製深鉢の底部片で、調整は外面がナデ、内面には巻貝条痕が施される。



第14図 第3号土坑出土土器実測図 (1/4)

第3号土坑 (第14図)

38 深鉢の胴部片で、外面に縦位の巻貝条痕が施された後に巻貝先端で斜位の1条沈線を施し、区画する。内面には粘土顆目に巻貝条痕が沈線状に残る。

39 深鉢の口縁部片で口唇部に間隔をあけてハの字状のキザメが施される。口縁部には幅広の突帯が付され斜位のキザメが施される。40 深鉢の胴部片で上下2条の沈線が区画する中にLRの縄文が横位に施文される。調整は内外両面に丁寧なナデが施される。41 深鉢の胴部片でRLの縄文が施文された後に浅い沈線により隅丸形状に区画される。

42 深鉢の胴部片で複数の沈線により曲線文が施される。調整は内外両面に丁寧なナデが施され、焼成も良好である。

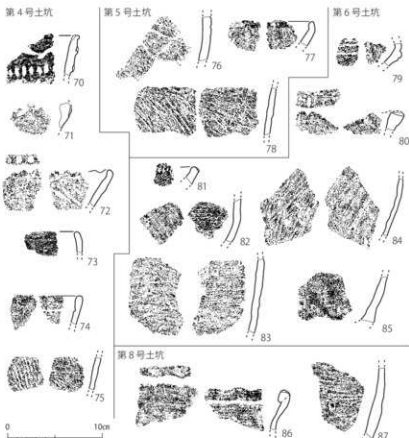
43 波状口縁粗製深鉢の口縁部片で、頂部を肥厚させ楕円状に深く窪ませる。調整は外面に斜位の擦痕が観察され内面はナデが施される。44 波状口縁粗製深鉢の口縁部片で、43同様に口唇部を肥厚させ楕円状に窪ませる。調整は内外両面に巻貝条痕が施される。45 波状口縁深鉢の口縁部片でキャリバー状に内湾し、第6号土坑出土の土器と接合する。調整は内外両面に丁寧なナデが施される。

46 波状口縁粗製深鉢の口縁部片で、頂部内面を肥厚させる。調整は内外両面に横位の巻貝条痕が施される。47 波状口縁粗製深鉢口縁部片で内外両面にナデが施される。48 わずかに波状を呈す粗製深鉢の口縁部片で、キャリバー状に内湾する。調整は内外両面に横位の巻貝条痕が施される。49 粗製深鉢の口縁部片で口唇部に指頭と思われる約1cmの幅広なキザメが付される。調整は内外両面に横位の巻貝条痕が施される。50 粗製深鉢の口縁部片で口唇部にキザメが付される。調整は内外両面に横位の巻貝条痕が施される。51 粗製深鉢の口縁部片で口唇部に間隔をあけたキザメが付される。調整は外面に縦位のナデ、内面には横位のナデが施される。52 粗製深鉢の口縁部片でやや肥厚しており、全体に緩やかな曲線を描く。調整は内外両面に巻貝条痕が施されるが、内面上方は横位のユビナデと見られる。53 粗製深鉢の口縁部片で全体にキャリバーを呈し、口唇部内面が突出する。調整は内外両面に巻貝条痕が施される。54 粗製深鉢の口縁部片でわずかに波状口縁を呈す。調整

は外面に巻貝条痕が施された後に、上部のみナデが加えられる。内面には横位の巻貝条痕が施される。55 粗製深鉢の口縁部片で口唇部の外面を突帯状に肥厚させ、口縁下部に1条の沈線が付される。調整は内外両面に横位の二枚貝条痕を施す。56 わずかに波状口縁を呈す粗製深鉢の口縁部片で口唇部内面を少し突出させる。調整は内外両面に横位の巻貝条痕が施される。57 粗製深鉢の口縁部片で、調整は内外両面に巻貝条痕が施される。58 粗製深鉢の口縁部片で口唇部は少し外反し、垂直面をなす。調整は外面に横位の巻貝条痕、内面には斜位の巻貝条痕が施される。59 粗製深鉢の口縁部片で口唇部が肥厚し、T字状をなす。調整は内外両面にナデが施される。60 粗製深鉢の口縁部片で口唇部が肥厚し丸味を帯びたT字状をなす。調整は内外両面に横位の巻貝条痕が施される。61 粗製深鉢の胴部片で調整は外面に横位の巻貝条痕、内面には斜位の巻貝条痕が施される。62 粗製深鉢の胴部片で調整は内外両面に横位の巻貝条痕が施される。63 粗製深鉢の胴部片で、調整は内外両面に横位の巻貝条痕が施される。64 粗製深鉢の胴部片で内外両面に二枚貝頂部の条痕が施される。65 粗製深鉢のやや厚手の胴部片で、調整は基本縦位の巻貝条痕で一部横位のものに切られる。内面は巻貝条痕が横位に強く施される。66 粗製深鉢の胴部片で、調整は内外両面にナデが施される。67 粗製深鉢の底部片で胴部ラインは強く開く。68 粗製深鉢の底部片で、調整は外面に指頭によるオサエが見られる。69 粗製深鉢の底部片で、調整は内外両面にナデが施されるが、底面には許り回りに施された巻貝条痕が観察される。

第4号土坑 (第15図)

70 深鉢の口唇部が外方に突出する口縁部片で口縁部外面に2条の突帯が付され、上方には短い沈線で連続的に山形状のキザミメが加えられ、下方には縦位のキザミメが施される。71 外方に屈曲する深鉢の胴部片で一部斜位の短い沈線が観察される。72 粗製深鉢の口縁部片で内面を指頭によって窪ませ口唇部に5mm幅のキザミメが付される。調整は内外両面に巻貝条痕が施されるが、内面は強く施されるため凹凸が生じる。73 粗製深鉢の口縁部片で屈曲丸味に内



第15図 第4号、第5号、第6号、第8号土坑出土土器実測図 (1/4)

湧し、口唇部は丸味を帯びる。調整は、外面に擦過痕があり、内面には条痕が観察される。74 粗製深鉢の口縁部片で口唇部はやや肥厚し、内面に幅5mmほどの沈線が付される。75 粗製深鉢の胴部片で調整は内外両面に二枚貝条痕を残すが、外面は縦位に施し、内面は横位の後斜位に加えられる

第5号土坑 (第15図)

76 深鉢の胴部片でやや右傾斜の3条沈線が付されそこに条間2mmの粗めの縄文RLが充填される。調整は荒れた表面に巻貝条痕が観察される。77 逆くの字状に屈曲する粗製深鉢の口縁部片で、調整は内外両面に指頭によるナデが施され、内面にも指頭痕が観察される。78 粗製深鉢の胴部片で、調整は内外両面に斜位の巻貝条痕が施される。

第6号土坑 (第15図)

第3号土坑の資料45で焼れているが当遺構から出土した土器片が接合しており時期の一致とともに第3号・第6号両土坑の関係が極めて密であることを示している。

79 深鉢の屈曲する口縁部片で2条の

沈線が付され、そこに巻貝の疑似縄文が充填される。80 波状口縁粗製深鉢の口縁部片で、肥厚した口唇部の頂部にキザミメが付され上唇状を呈す。81 波状口縁粗製深鉢の口縁部片で口唇部にキザミメが付される。82 粗製深鉢の胴部片で、調整は外面に斜位の巻貝条痕、内面には横位の巻貝条痕が施される。83 粗製深鉢の胴部片で、調整は外面に横位の巻貝条痕が施されるが、内面は横位の二枚貝頂部の条痕と判断した。84 粗製深鉢の胴部片で、調整は外面に斜位の巻貝条痕が加えられ、内面は指頭による横位のナデが施される。85 粗製深鉢の底部片で、調整は外面に指頭による縦位のナデが施される。

第8号土坑 (第15図)

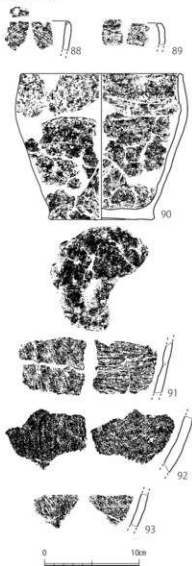
86 粗製深鉢の口縁部片で、口縁部内面に除帯状の粘土を貼り付けて返し状とした後に上部を指頭による浅いキザミメで細かな波状とする。調整は外面に横位の巻貝条痕が加えられ、内面には横位のナデが施される。87 粗製深鉢の胴部片で、調整は外面に横位の巻貝条痕が施される。なお、外面下方には6×5mmの楕円状に窪みがあり、植物種子の圧痕と

観察される。

第11号土坑 (第16図)

88粗製深鉢の口縁部片で口唇部に間隔をあけキザミメが付される。調整は内外両面に条痕が施される。89粗製深鉢の口縁部片で、調整は内外両面にナデが施される。90粗製深鉢の反転復元図で口径16.8cm、最大径18.2cm、器高15.5cm、底径11.2cmを測る。直口口縁の下部は逆くの字状に湾曲し、大きめの底部に続く。調整は内外両面にナデが施される。91粗製深鉢の胴部片で、調整は外面に斜位の巻貝条痕が加えられ内面には横位の巻貝条痕が施される。なお、外面には成形時の指頭による斜位の強いナデが観察される。92粗製深鉢の胴部片で、調整は外面に縦位の擦痕が観察され加えられ、内面は横位の擦痕が観察さ

第11号土坑



れる。93粗製深鉢の胴部片で、調整は外面に斜位の巻貝条痕が加えられ、内面には横位の巻貝条痕が施される。

第13号土坑 (第16図)

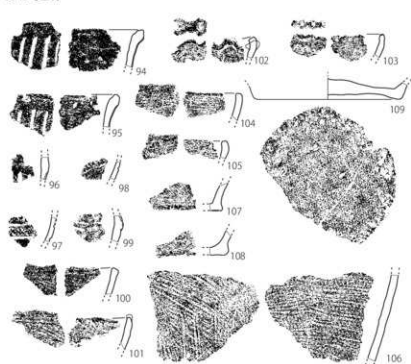
94・95は同一個体か、深鉢の口縁部片で口唇部は丸味を帯びて肥厚し口縁下から縦位もしくはやや斜位に幅4mm前後の凹線が1cm間隔で連続的に施される。胎土には滑石が含まれ、内外両面は滑らかである。96深鉢の口縁部付近の破片で縦位に幅4mmの凹線が4mm間隔で付される。胎土に滑石は含まれない。97深鉢の胴部片でやや左傾斜の2条沈線が付され、LRの縄文が充填される。調整は内外両面に丁寧なナデが施され外面は平滑でミガキに近い。99深鉢の口縁部下方片で全体が緩やかに屈曲し、上面が指頭痕状に窪む。正面に横位の2条沈線が付される。100わずかに波状を呈す粗製深鉢の口縁部片で、口唇部外面を若干肥厚させる。調整は外面に斜位の巻貝条痕が加えられ、内面には横位の巻貝条痕が施される。101わずかに波状を呈す粗製深鉢の口縁部片で、頂部の内面を若干突出させる。調整は外面に斜位の巻貝条痕を施した後に上

部のみ横位に加え整えられる。102粗製深鉢の口縁部片で、口唇部の内面に隆帯状の粘土が貼り付けられ、上部に指頭による1cm幅のキザミメが施される。103粗製深鉢の口縁部片で逆くの字状に屈曲し、口唇部には浅いキザミメが付される。調整は外面に横位の指ナデが施される。104粗製深鉢の口縁部片で、調整は横位の巻貝条痕が施される。105粗製深鉢の口縁部片で、やや肥厚する。調整は内外両面に横位の巻貝条痕が施される。106粗製深鉢の胴部片で、調整は外面に斜位の後縦位の巻貝条痕が加えられ、内面には横位の巻貝条痕が施される。107粗製深鉢の底部片で、端部が強く張り出し、上部へと外反する。108粗製深鉢の底部片で、端部は丸味をおびて張り出し、内面は湾曲する。109大型深鉢の底部片で、底面周囲に成形時の圧痕が観察される。圧痕は不明だが楕円状の窪みが規則的に並ぶような状況で何か編んだものを敷いていた可能性がある。

包含層 (第17図)

110深鉢の胴部片で、調整は内外両面をナデにより平滑に仕上げられ胎土には滑石が多く含まれる。111深鉢口縁部片で、口唇部が緩やかな起伏を示す波状口縁の可能性はある。外面に2条の

第13号土坑



第16図 第11号、第13号土坑出土土器実測図 (1/4)

突帯が付され、上方には短い沈線での字状のキザミメ、下方には縦位のキザミメが付されている。調整は内外両面に横位のナデが施される。112 深鉢の口縁部片で、幅 2cm の肥厚帯に RL の粗目の縄文が横位方向に施される。調整は内面に横位の巻貝条痕が施される。113 鉢か浅鉢の口縁部片で、逆くの字状に強く屈曲する。調整は内外両面に横位の巻貝条痕が施される。114 波状口縁深鉢の口縁部片で頂部は渦巻き状を呈す。調整は内外面に横位の巻貝条痕が施されるが、外面は特に丁寧に仕上げられる。115 粗製深鉢の口縁部片で口脣部に指頭による 1cm 幅のキザミメが施される。調整は内面に横位の巻貝条痕が施されるが外面は不鮮明である。116 粗製深鉢の口縁部片で、口脣部には巻貝の先端によるキザミメが斜位に付される。調整は内外両面に横位の巻貝条痕が施される。117 粗製深鉢の胴部片で、緩やかな S 字状を呈し調整は内外両面に横位の巻貝条痕が施される。118 粗製深鉢の底部片で、底面に長さ 5 ~ 10mm の円形や楕円形の窪み状に圧痕が観察される。調整は内外両面に巻貝条痕が施される。119 粗製深鉢の底部片で、底面が外方に大きく張り出す。

石器

第 2 号土坑 (第 18 図)

120 黒曜石 (漆黒) 製縦長剥片で長さ

3.2cm、幅 1.4cm、厚さ 6mm を測る。右に湾曲しており打面調整が見られる。また、左側縁には横位の粗い剥離が観察され、石核剥離面の調整剥片とも考えられる。

第 3 号土坑 (第 18 図)

121 黒曜石 (漆黒) 製打製石鏢で長さ 2.5cm、幅 1.1cm、厚さ 3mm の凹基無茎鏢、やや右に湾曲するが全体にシャープで丁寧な仕上がりにある。122 黒曜石 (漆黒) 製縦長剥片の折損品で、長さ 2.8cm、幅 1.8cm、厚さ 8mm を測る。打面は尖頭状で細かな調整が見られ背面左側縁に横位の剥離があり、自然面を残す。123 片刃器で長さ 15.3cm、幅 9.9cm、厚さ 4.8cm を測る。当資料は柱の根固め石の一つとして遺構内より検出され、石材は緑色の片岩系で扁平な円礫が使用される。その薄手で幅広い側縁部の片側から複数の片理面を断ち切るように粗く大ぶりの連続剥離により刃部が形成される。

第 5 号土坑 (第 18 図)

124 黒曜石 (高い透明度) 製サイドブレードで長さ 3.5cm、幅 1cm、厚さ 4mm を測る。背面が自然面の横長剥片端部に背面側から細かな二次加工が施され、鋸歯状に仕上げられる。また、打面側にもバルブ調整の剥離が施される。

第 6 号土坑 (第 18 図)

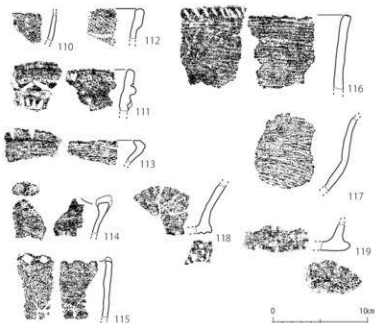
125 磨石 (赭石兼用) で長さ 14.8cm、幅 10cm、厚さ 8cm を測る。当資料は柱の根固め石の一つとして遺構内より検出されたもので、石材は花崗岩系の楕円形円礫が使用される。長軸両端部はタタキ痕のため凹凸があり、短軸両端部もタタキ痕により粗い。それ以外の面は全てに使用による擦痕が観察され表面が滑らかである。

不明土坑 (SX2) (第 18 図)

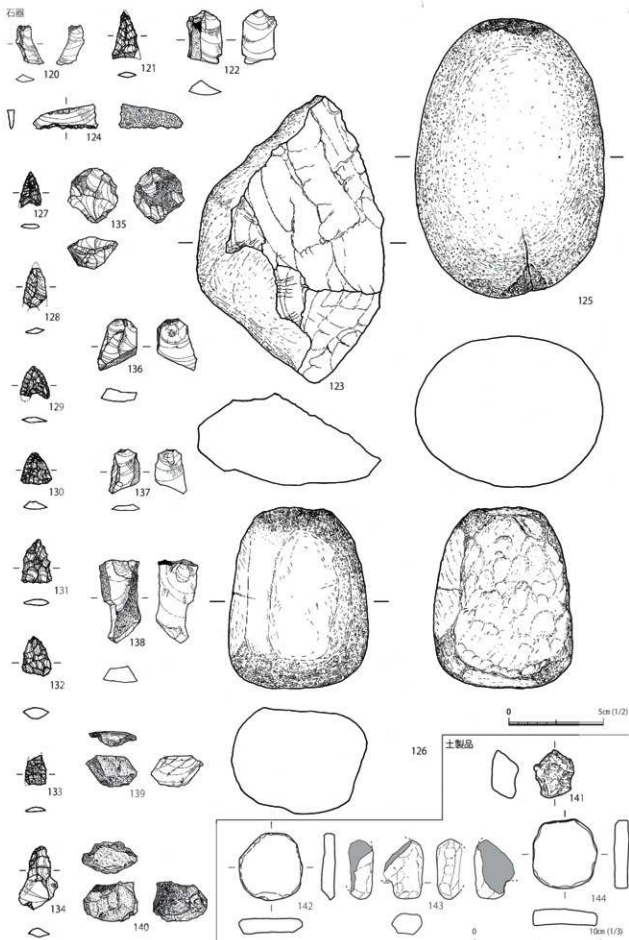
126 磨石 (磨石兼用) で、長さ 9.6cm、幅 7.1cm、厚さ 5.6cm を測る。石材は花崗岩系の垂直円礫を使用し、表面の上下両端から右側面部にかけ、また表面は四方の角面にタタキ痕が観察される。裏面の平坦部はタタキ石としてよく使用され、1 ~ 2cm の浅い窪みが幾重にも連なる。

包含層 (第 18 図)

127 黒曜石 (漆黒) 製打製石鏢で長さ 1.9cm、幅 1.1cm、厚さ 2mm の凹基無茎鏢、脚部の一部を欠き左右対称で全体がシャープで丁寧に仕上げられる。128 黒曜石 (漆黒) 製打製石鏢で長さ 2.1cm、幅 1.1cm、厚さ 3mm の凹基無茎鏢、先端部及び両脚部を欠き調整は楕状を呈し、丁寧である。129 黒曜石 (漆黒) 製打製石鏢で、長さ 1.7cm、幅 1.6cm、厚さ 3mm の凹基無茎鏢、脚部の一部を欠き全体に丸味を帯び周囲が細かく調整される。130 黒曜石 (漆黒) 製打製石鏢で、長さ 1.7cm、幅 1.4cm、厚さ 4mm の平基無茎鏢、正三角形で左側縁から基部が丁寧に調整される。131 黒曜石 (漆黒) 製打製石鏢で長さ 2.4cm、幅 1.4cm、厚さ 3mm の平基無茎鏢、二等辺三角形状で、先端部は左右の対称性を欠き、調整も全体に粗い。132 黒曜石 (姫島産灰白色) 製打製石鏢で長さ 2cm、幅 1.1cm、厚さ 6mm とやや厚い平基無茎鏢、正三角形を意識しながらも左右対称ではなく全体に粗く仕上げられる。133 黒曜石 (漆黒) 製打製石鏢で、長さ 1.6cm、幅 1.1cm、厚さ 2mm の薄手で先端を欠く平基無茎鏢、二等辺三角形状と推定される。134 黒曜石 (漆黒) 製割器で長さ 3.4cm、刃部幅 1.2cm、厚さ 5mm を測り、縦長剥片の末端が厚く、ヘンジフランクチャーの素材を使用する。打面側面



第 17 図 包含層出土石器実測図 (1/4)



第18図 土坑及び包含層出土石器120-140 (1/2)、土製品141-144 (1/3) 実測図

身の背面部分に横位の調整が行われ丸味のある片面加工の刃部に仕上げられる。裏面には使用のため細かい擦痕が観察される。135 黒曜石(漆黒)製石核で長さ3.6cm、幅3.3cm、厚さ2.1cmを測る。形状は亀甲状を呈し、周囲より中心に向かい時計回りに不定形な剥片を連続的に剥く。側面を観察すると表面の角部剥ぎ取り箇所を打面とする剥片の剥ぎ取り状況が観察される。136 端部が自然面の縦長剥片で長さ2.8cm、幅2cm、厚さ6mmを測る。長さの割にやや厚手で自然面を打面とする。137 下半部欠損の縦長剥片で長さ3cm、幅2cm、厚さ4mmを測る。自然面を打面とし右側縁部にも自然面が残る。138 サケ木割製縦長剥片で長さ5.4cm、幅2.6cm、厚さ1.1cmを測る。自然面の打面と背面の剥ぎ取り痕及び周囲の自然面の状況から、角礫状の原石角部の打撃剥片で形状、厚み、打撃位置や自然面の残存状況から石核の成形段階のものとして判断した。139 黒曜石(漆黒)製縦長剥片で長さ2cm幅3.3cm、厚さ1.1cmを測る。打面は一撃で広く平坦に調整され背面は自然面で石核成形剥片と判断した。140 黒曜石(漆黒)の原石で長さ2.4cm、幅3.4cm、厚さ2cmの角礫状である。

土製品

第2号土坑(第18図)

141 不明の土製品で長さ3.8cm、幅3.2cm、厚さ2.1cmを測る。五角形の形状で指頭による成形がなされ、焼成はあまく軟質で、胎土にわずかな砂粒が含まれる。

第13号土坑(第18図)

142 円盤状土製品で長さ5.4cm、幅5cm、厚さ1.2cmを測る。外面に斜位の条痕が施された粗製深鉢の胴部片を使用し、周囲に細かい加工痕が観察される。円形を基本とするが上半部がややびつである。

包合層(第18図)

143 土偶脚部片(左脚部)で長さ4.6cm、幅2.4cm、厚さ1.5cmを測る。当資料は左側の腰部から足部先端と股間部付近までであったが、裏面の臀部から下方については発掘の際の欠損である。おそらく、祭祀等により土偶本体から打

ち折られたものであろう。144 円盤状土製品で長さ5.5cm、幅5cm、厚さ1.1cmを測る。形状は隅丸形状で粗製深鉢の胴部片が使用される。

小結

遺構及び包合層等から出土した縄文土器は、復元1個体を含め116点である。資料94・95に代表されるが滑石を含み滑らかな器面に縦位の凹線文を付すものと、文様帯が上部に止まる無紋の胴部片と考えられる14がある。何れも阿高系であるが、諸特徴はすでに後期の様相を示している。加えて、滑石は含まないが4の重層する凹点文、5の横位に短い沈線文を重ねるといった直線や短沈線、凹点文の単発的なものもある。また、資料15・16・19・39・70・111は口縁部を幅広い帯状に肥厚させた(口縁帯)上に粘土紐を突帯状に1~2条付し、連続したハの字状、斜位、縦位等のキザミメを施す特徴的な深鉢と資料28・29・49~51・72・86・88・102・103・115・116の平坦口縁で口唇部にキザミメを施す粗製深鉢の一群がある。それらもまた後期阿高系の(II)群として括ることが出来る。つぎに、後期阿高系とされる在来系土器群に対し、外來系土器群として把握される磨消縄文系土器群の資料が得られている。資料21・40~42・76・79・97・98・112は2条や3条の沈線間に縄文が充填されるが、沈線間は狭く縄文の条も細いし113の口縁部は強く屈曲して特徴的である。何れも福田KII式と考えられる。6・76は中津式、肥厚した口縁部に縄文を施す113は広く縁帯文土器と捉えたい。それらに伴うものとし23~26・33・43・45~47といった波状口縁と縄やかな「く」の字状に屈折する胴部に貝殻条痕を施すもの、あるいは48・52~54のように平坦口縁に同様の胴部と調整を施すものが示される。

以上、当調査区内で得られた縄文土器は後期阿高系(坂の下・南福寺・出水)土器群と福田KIIを主とする磨消縄文系土器群が共出しており、時期としては観ね縄文後期初頃から前葉に納まるものと考えられる。

遺構に関してには柱痕検出並びに柱の根固め土を伴う土坑群(第2号・第3号・第4号・第6号)について触れておこう。第3号と第6号両土坑より出土した

縄文土器の資料45は互いに接合しており、両者の関係は緊密で2つは柱穴としてのセット関係にあったと考えている。両者の平面形は円形を基本とし、規模は直径70~80cm、深さは共に55cmで、断面が1段掘り込みの方形状を呈す。内部は円縁が集積するが、中央東寄りの方に張り付く光景が両者共通している。第3号土坑の下部では円形空間と重なる位置の下方に柱痕が検出されたことから、周囲の円縁は柱の根固め石と判明、第6号土坑も同様の柱穴構造でセット関係にあり、両柱穴に納まった柱は抜かれることなく放置された事が根固め石の未崩落状況から確認された。

第2号と第4号両土坑は平面形が円形を呈し、深さ60cmの2段掘り込み構造である。共に柱痕が確認され直径30cmの丸太状の柱が建てられていたことが判明した。しかし、先の第2号・第6号両土坑とは異なり柱穴内の埋土を掘り下げて柱を抜いており、その際に、第2号土坑では柱穴を大石で塞ぎ横に土製品を入れた後に大量の円縁と土で埋め戻している。第4号土坑は柱穴に小縦じりの土を詰めた後、再び礫を必ずわずら土砂で埋め戻している。柱の形状、大きさや抜き行為も共通しており、第3号・第6号両土坑と同様に両者はセット関係にあったと考えられる。なお、埋め戻しの際の石と土という違いはあるが、祭祀上の問題であり、2本の柱はそれぞれ異なる意味を持つかもしれないが、それらを2本建てる事で大きな意味をなすと想像される。

第2号土坑・第4号土坑(A)と第3号土坑・第6号土坑(B)の前後関係は第2号土坑・第4号土坑(A)→第3号土坑・第6号土坑(B)となる。先に第2号土坑・第4号土坑が建てられたが、何らかの理由で建て替えられることとなり、祭祀を伴って抜き取りが行われた。その後、新たに第3号土坑・第6号土坑が建てられたが、抜き取られることもなく終焉を迎え朽果てたものと考えられる。本来、2本の柱は互いに異なる存在であるが、1本では存在の意味を持たず2本で1単位として機能するものと考えられる。第2号土坑・第4号土坑間の

距離は3.15m、第3号土坑・第6号土坑間が3.25mと柱間がほぼ一致しており、解明への1つのカギとなろう。また、2本柱の方位が第2号土坑・第4号土坑の場合南北を示し、正面は東西方向に向く。第3号土坑・第6号土坑は前者と異なる方位を東北東にとる事から、正面が南南東を向く事になる。春分・秋分・夏至・冬至といった太陽の軌道と考え合わせる事も必要であろう。

最後に、類例として福岡県福岡市東区名子遺跡3次調査2区で複数検出された「石入り土坑」(田中)について取り上げよう。同遺跡は多々良川を挟んで北側に位置しており直線距離で1.1kmと近い位置にある。現水田面で標高12.9m、猪野川の西に形成された狭小な沖積地に立地する。時期は縄文時代後期

前半から中頃で阿高系や中津・福田KI式が含まれるが中期の船元式、後期中頃の鐘崎式、北久根山式も含まれる事から、戸原伊賀遺跡より年代幅は広い。遺構は2区に集中しており、多数の石入り土坑が検出されている。規模は40cm前後から1m近くのものまであり、中に大量の小礫や拳大の礫が入っており、検出状況から柱の柱固め石と解釈されるものもあり、その中で並びがあるものを建物跡として捉えている。戸原伊賀遺跡では建物としての並びはなく、2本柱の構築物と捉えたが、その西方側に竪穴建物が位置する事から集落の中心部に建てられていた可能性があろう。名子遺跡の場合はそこまで把握することは出来ないが、縄文時代後期前半期の集落を考える上で重要と思われる。

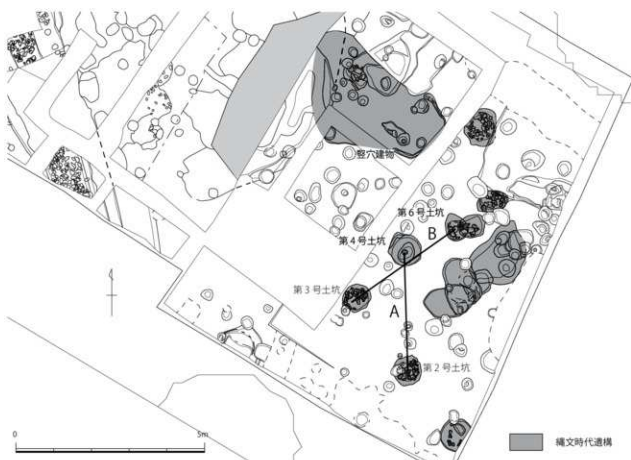
註

註1 跡もしくは小型の跡で類例に乏しいが、田中良之1994「阿高式土器」『縄文文化の研究』4 縄文土器II 鍾山園の阿高II式の2番と水ノ江和岡2009「九州における縄文時代中期と後期の境界問題-はたして阿高式は中期土器か、後期土器か?」『古文化論叢』第62集 古文化研究会の図1阿高式古段跡1番に器形の類似が見られる。しかし、時期差が大きいため一定その系譜上に位置すると考えておく。

註2 佐賀県唐津市徳蔵谷遺跡SK611の資料NO15と同じ。唐津市教育委員会「徳蔵谷遺跡(3)」唐津市文化財調査報告書68集

註3 田中良之1982「磨湾式土器伝播のプロセス-九州を中心として-」『古文化論集』上巻 森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会

註4 福岡市教育委員会2011「名子遺跡1」-第3次・第4次調査報告-福岡市埋蔵文化財調査報告書第1123集



第19図 縄文時代遺構分布、祭祀遺構想定ライン(1/100)

古墳時代

遺構

第1号竪穴建物(第20図)

建物の南西コーナー付近の東西2.4m、南北2.1m、深さ9cmの部分を検出した。南側壁面中央付近に接して長さ80cm、幅60cm以上、深さ30cmの屋内貯蔵穴が存在し、その西側に長さ1m、幅65cm、高さ4cmの帯状の高まりが続く。また、高まりと壁面との間に長さ80cm、幅10cm、深さ5cmの短い周壁溝を確認した。

第2号竪穴建物(第20図)

第1号竪穴建物と構造物に大きく切り取られており、壁際土坑と南側壁面の一部が検出された。なお、壁際土坑と縄文時代の第13号土坑がほぼ重なるように切り合うため、平面及び立面で両者を区分できなかつた。なお、壁際土坑上面は古式土師器が観察され、中・下層の河川礫が検出される範囲は縄文土層のみである。

第3号竪穴建物(第20図)

壁面がかなり傾平され、北側半分は調査区外となっている。平面形は方形を呈するようで、東西両脇にベッド状遺構が設けられている。南壁面の長さ2.1m、南北1.6m以上、深さ8cmを測り、中央北側に東西52cm、南北26cm以上、深さ9cmの地床跡が検出されている。南壁側には壁面に接して東西1.16m、南北88cm、深さ30cmに半円形の壁際土坑が設けられている。柱穴は判然としないが、東西のベッド状遺構の上にP1とP2の2か所にビットが存在し、中央付近の貯穴の位置からして2本柱の可能性が高い。P1は楕円形で東西38cm、南北28cm、深さ30cm、P2は楕円形で東西27cm、南北40cm、深さ11cmを測る。

古墳(第21図)

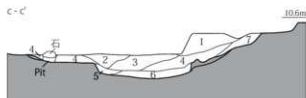
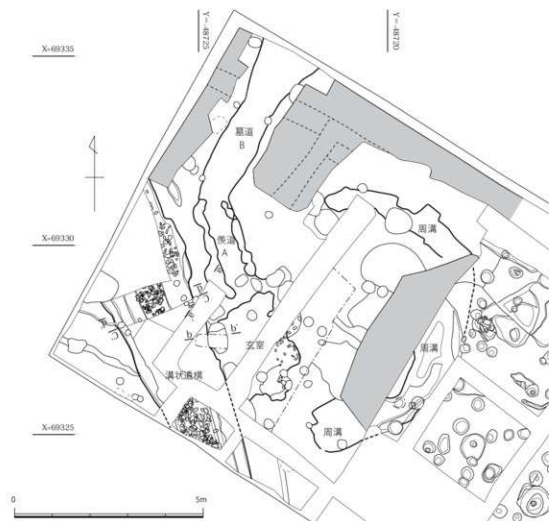
調査区の中央から西側半分ほどの位置に円墳が1基存在した事が判明した。しかし、南西側の溝状遺構と後世の掘削や構造物の建築によって、墳丘や石室はおろか周溝部分のほとんどが消滅しており、わずかな掘り込み部分の残存によって空室、羨道、墓道、周溝などの概況が

分かるにすぎない。空室及び羨道部は石材及び床石など全てが失われており、石室の掘方や石の抜き取り穴により確認を進め、墓道や周溝についても残存する下層部分でようやく確認が可能であった。

羨道部を含め石室は中軸線をN-16.9°-W(A)に方位を取る両袖式単質の構造で、空室規模は掘方の内法で奥行1.85m、幅1.2mの長方形プランを呈す。玄門部に3箇所、の抜き取り穴があるが、両サイドの縦長ビットは玄門部の抜き取り穴で、その間の横長ビットが石室の抜き取り穴と考えられ、羨道部は長さ2.1m、幅50cmを測る。羨道の開口部両サイドの抜き取り穴が内向きになっており羨門部を示すものか。その先は墓道となるがその中軸線はN-28.1°-E(B)に方位を変え、北側へと進んで北側調査区の外方へ続くが、地形はその当りで崖状に降下する事から墓道の入口付近に到達していると推定される。墓道は長さ4.38m、羨門部付近が幅40cmを測るが途中1mまで張り出し、胴張り状となった後80cm幅まで狭くなる。墓道入口付近ではハの字状を呈し幅2.4mまで広がる。周溝部は幅1m前後で石室の東側を中心に楕円形状に残存することから、直径10m程度の円墳であったと推定され

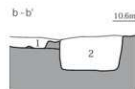


第20図 第1号、第2号、第3号竪穴建物平面図(1/60)



1. 旧耕作土 灰褐色土 (7.5YR4/2)
2. 包含層 灰褐色土 (7.5YR5/2)
3. 溝状遺構 灰褐色土 (5YR4/2) と灰オリブ色シルト (5YR5/2) の混合層
4. 溝状遺構 灰褐色土 (5YR4/2)
5. 墓道 灰黄褐色土 (10YR5/2) 灰オリブ色シルト (5Y5/2) をブロック状に含む
6. 古墳盛土 にふい褐色砂質土 (7.5YR5/3) 地山 明褐色粘質土 (7.5YR5/6)

1. a-a' (3 層)
2. a-a' (4 層)
3. にふい黄褐色土 (10YR5/4)
4. 灰褐色土 (10YR4/2)
5. 暗褐色土 (10YR3/3) シルト質で硬くしまる
6. 黒褐色砂礫層 (10YR3/2) 礫質 3~5cm の礫と 1cm 未満の礫が混ざり込む
7. にふい褐色土 (7.5YR5/4) 地山が混ざる 地山 明褐色粘質土 (7.5YR5/6)



1. 溝状遺構 灰褐色土 (5YR4/2)
2. 基礎石抜き穴 (埋土) 灰褐色土 (5YR4/2)
- 地山 明褐色粘質土 (7.5YR5/6)

第 21 図 古墳、溝状遺構平面図 (1/100)、古墳関係遺構土層図、溝状遺構土層図・断面図 (1/30)

る。

しかし、古墳の南西側を縦走する幅2mほどの溝状遺構は、石室の右側壁部から外側まで50cm、西側が高く東側は石室を含め古墳の半分近くは完全に失われたものであろう。

溝状遺構 (第21図)

調査区南西のコーナー部分を南北に縦走する幅2～2.2mの2段掘り込みの溝である。底部は断面が弓なりを呈し、最深部で深さ50cm、西側が高く東側は低くなって比高差25cmを測り、土層を観察すると南側の高い位置から順次堆積することが分かる。また、底部には5cm前後と10～20cmに大別される円礫が堆積しており、調査範囲を含め溝全体が石敷きの様相である。しかし、堆積状況を観察すると、小礫が下層を占め、大きいものは上層に集中しており、下層の小礫は溝の当初の堆積によるもので、その後大きな礫が堆積するという前後関係を示すと考えられる。さらに、土層の堆積状況と合わせると、相対的ではあるが、溝が埋もれていく当初小礫が底部に流れ込み、その後大きな礫が流れ込みながら堆積し、やがて土層の堆積がはじまり、溝そのものの機能が失われてしまったという事であろう。重要な点は観察される大小の礫が石敷きではなく、堆積土と同様に南側の高い方から流れ込んだと考えられる点である。もちろん礫は円礫であるが、大きなものは緑色や青色を基本とする円礫で風化が進まない硬いものを使用し、大ききも10～20cmと一定している。遺跡内堆積土(砂礫層)中の円礫は褐色系の風化が進んだ軟質礫で、両者の差は大きく、前者は河川より持ち込まれたものと判断される。つまり、幅2mの溝底を埋め尽くす量の河川礫が人為的に運搬され、当溝の南側に構築物を含む何らかの遺構形成に使用されていた可能性が高い。さらに、再度観察すると東西両端の比高差が25cmで底部面がほぼ平坦であることから、溝幅の両端で相対的に溝の深さが異なっても機能的には問題はなく、断面形も全体に緩やかな弓状を呈して全体に浅い構造である。また、2段掘り込みではあるが、中央部幅70cm、東西のテラス幅もそれぞれ70cmほどと全て同じ幅で、テラスと中央掘り込みの深さの差も20cm程度とかなり浅い。構造的には両

側のテラスを深掘りのための足場と捉える事は出来ず、通常の水路として灌漑等用排水路や防御機能をも有する環濠とは考えられない。可能性として道路状遺構の側溝を想定したい。

古墳と溝状遺構の前後関係について土層図a-a'(第21図)を観察すると、1層は旧耕作土、2層は12世紀後半頃を中心とする包含層で、両者は調査区全体を覆う基本層である。3層と4層は溝状遺構の堆積層で2層に大きく切られているが、本来は4層の左側立ち上りラインが上方に延びて3層の左側部分とつながり、溝北側の掘方ラインを示すものである。5層は古墳後遺部の埋土、6層は古墳盛土の最下層部で共に破壊された古墳に関連するが、2層により大きく切られ基礎の地山上にわずかに5cmほどの厚さで確認出来る。5層右側の緩やかな立ち上りラインは6層の古墳盛土を切っており、墳丘の盛土形成のある段階で環濠が構築された事が理解されるよう。また、溝状遺構の4層が6層の古墳盛土を切っている事は、先に古墳があって後に溝状遺構がつくられたという前後関係の証明ともなる。つまり、2層と5、6層の関係から溝状遺構の構築に伴って古墳が大きく破壊されたことは明確で、古墳の盛土がわずかに最下層部分を残す所まで傾斜が及んだ事が分かる。続いて、土層図b-b'(第21図)は古墳の石室に関し左室右側壁部の基礎石(腰石)抜き取り穴と西側の溝状遺構の切り合いを示している。1層は溝状遺構テラス部分の埋土で幅10cmに満たない。2層は地山に掘り込まれた基礎石を据えるための穴で、30cmに満たない深さが確認される。1層は2層の上部をわずかに切り込んでおり、前後関係に矛盾はないが、抜き取り穴の底から25cm上方に

は溝状遺構の掘方がくび込んでおり、平面的には右側壁の基礎石全てが抜き取りの対象になった事は確実で、構造上盛土は基より天井石や奥壁にも影響する事からして奥津城としての古墳は事実上完全消滅という結論に達する。

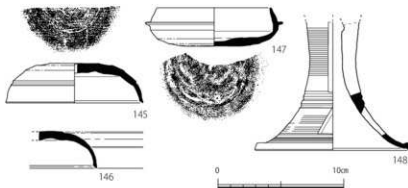
先に溝状遺構を道路状遺構の側溝と想定している。その上で、古墳1基の完全消滅は道路状遺構の構築が原因であり、盛土及び石室石材等の全てが基礎の地山上にわずかに残るほどに傾平された事実が浮上する。

遺物

土器

第1号竪穴建物(第22図)

145須恵器の杯蓋で口径14.6cm、器高4.2cmを測る。体部は厚手で丸味を帯び器高が高く安定したつくりで、天井部と口縁部の境に1条の幅広沈線(凹線)が付され、口縁端部の内面には段が残る。調整は天井部に回転ヘラクズリが加えられ、内外両面に横位のナデが施される。天井部内面には成形物の青海波クタクメが残る。色調は灰色だが一部に灰白色の自然釉が見られ、胎土に粗い石英粒が含まれる。146須恵器の杯蓋で器高4cmを測る。体部は厚手で丸味を帯び器高が高く安定したつくりで、天井部と口縁部の境に1条の弱い沈線が付され、口縁端部の内面には段が残る。調整は天井部に回転ヘラクズリが加えられ内外両面に横位のナデが施される。147須恵器の杯身で口径12cm、受部径14.6cm、器高4.1cm、立ち上り高1.5cmを測る。立ち上り部は高く幅広で丸味のある体部は深く安定したつくりで、調整は底部に回転ヘラクズリが加えられ内外両面に横位



第22図 1号竪穴建物出土土器実測図(1/4)

のナデが施される。底部内面には成形時の青海波タタキメが残る。148 須恵器の長脚 2 段スカシの高杯で底径 16.2cm、器高 13.6cm を測る。底部はラッパ状に聞き端部を折返して段をつくる。2 段上部のスカシは長方形、下部は三角形を呈し上下それぞれに 3 か所付される。また、両者の間には区画するように 2 条の凹線が施され調整は外面のほぼ全体にカキメが施されるが、内面には厚く自然釉が掛るため観察できない。

第 2 号竪穴建物 (第 23 図)

149 土師器の甕で口径 16.1cm、器高 23.9cm、器壁厚 3～4mm を測る。くの字状に外反する口縁部は微妙に外湾し口唇部内面もわずかに突出する。胴部は全体に丸味を帯び、中央付近に最大径が位置し、底部は丸底だが尖底の雰囲気を残す。調整は外面全体に縦位のハケメが施された後に胴部上半を中心に横位のハケメが加えられるが、中位以下は間隔が開く。内面は頸部の屈曲ラインから 1cm ほど下方よりヘラケズリが施される。

古墳玄室内 (第 23 図)

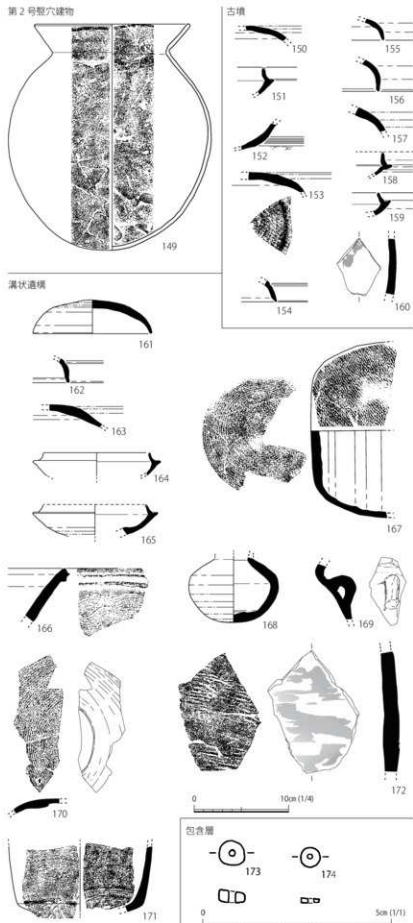
150 須恵器杯蓋で器壁厚 8～9mm、調整は天井部に回転ヘラケズリが加えられ、内外両面に横ナデが施される。151 須恵器杯身で器壁厚 4～6mm、立ち上りは直立し、高さ 1.3cm ほどである。152 須恵器無蓋高杯で、全体に浅く、大きく聞き器壁厚 7mm を測る。調整は内外両面に横ナデが加えられるが、体部屈曲面の外面にはカキメが施され、その下方は手持ちのヘラケズリとなる。

古墳墓道内 (第 23 図)

153 須恵器杯蓋で器壁厚 5～6mm、調整は天井部に回転ヘラケズリが加えられ、内外両面に横ナデが施される。天井部内面には成形時の青海波タタキメが残る。

古墳周溝内 (第 23 図)

154 須恵器杯蓋で器壁厚 4mm、口縁上部に 1 条の沈線を付し、口縁部内面の段は収跡のみとなる。155 須恵器杯蓋で器壁厚 4～5mm、現高 2.2mm で器高は低く低平で、口縁部に沈線や段はなく口縁部内面も滑らかである。156 須恵器杯蓋で器壁厚 5mm、現高 3.3cm



第 23 図 第 2 号竪穴建物 (149)・古墳 (150～160)・溝状遺構 (161～172) 出土土器 (1/4)、包含層 (173、174) 出土石製品実測図 (1/1)

で、器高は高く体部に丸味を帯びるが口縁部に沈線や段はなく口縁端部内面も滑らかである。157 須恵器杯蓋で器壁厚 6～9mm と厚手と厚手で器高も高く、調整は外面のやや下方まで回転ヘラケズリが施される。158 須恵器杯身で器壁厚 3～4mm と薄手で、立ち上りは内面の屈曲が強直して高さ 1.4cm を測る。159 須恵器杯身で器壁厚 5～6mm、立ち上りは内傾し、高さ 9mm で受部がやや深い。160 須恵器甕の胴部片で五角形状を呈し、長さ 6cm、幅 4.5cm、器壁厚 7～9mm を測る。内面には平行タタキメが薄く残り左側上面には患痕状の部分が確認できることから転用説の可能性が考えられる。

溝状遺構 (第 23 図)

161 須恵器杯蓋で口径 12.6cm、器高 3.6cm、器壁厚は天井部が 9mm と厚手のつくりを示し、全体に小ぶりで低平である。調整は天井部に粗略な回転ヘラケズリが加えられ、内外両面に横ナデが施される。162 須恵器杯蓋で器壁厚 5mm、口縁部が直立気味に立ち上り、器高は高いと考えられる。天井部と口縁部の境に弱い段を有し、口縁端部内面には返り状の段が残る。調整は内外両面に横ナデが施される。163 須恵器杯蓋で器壁厚 5～9mm、天井部から後門部へのラインがやや平坦化し、調整は天井部に回転ヘラケズリが加えられ、内外両面に横ナデが施される。164 須恵器杯身で口径 11.2cm、受部径 13.6cm、立ち上り高 8mm を測る。立ち上がりは内傾し、外湾した内面に弱いラインが見られ、調整は内外両面に横ナデが施される。165 須恵器杯身で口径 11cm、受部径 13.2cm、立ち上り高 7mm を測る。立ち上がりは内傾し、内面は屈曲気味で調整は底部に回転ヘラケズリが加えられ、内外両面に横ナデが施される。166 須恵器甕で外反する口縁部に方形状の粘土を貼り付け、中央部に強いナデを加えて口縁端部をつくる。口縁部全体にタタキメが加えられた後に 6 条からなる波長の長い波状文を上部から下部へと順次施す。167 須恵器横瓶で現高 18.6cm、器壁厚 5～8cm を測る。調整は外面全体にタタキメが加えられ内面には強い横ナデが施される。168 須恵器甕で現高 6.6cm、器壁厚 9mm と厚く球形の胴部はやや横に張出し、底部は丸底だが胴部にライン

が入る。調整は体部下半から底部へと回転ヘラケズリが加えられ。

上半部には横ナデが施される。169 須恵器器提振の把手部で半環状を呈し把手の長さ 3.8cm、厚 1.2cm を測る。調整は把手部分にユビナデが施され、体部外面にはナデ、内面は縦位のユビナデが施される。170 須恵器提振の胴部で外面はタタキメが加えられ内面には横ナデが施される。また、内面には体部上面を塞ぐ門盤形粘土の貼り付け痕が段状に残る。171 須恵器椀 (金属器模倣品) で現高 7cm、下方後縁部の径 13.4cm、器壁厚は体部で 6～8mm、後縁部は 1.1cm を測る。調整は外面の前面にタタキメを施し、内面は横ナデにより平滑に整えられている。172 須恵器大甕の胴部片で五角形状を呈し長さ 13cm、幅 9cm、厚さ 1.5～1.7cm を測る。内面には同心円状の青海波タタキメが薄く残る上に平行タタキメが加えられている。中心部と上方部を中心に患痕状のものが前面に付着し、160 と同様に変用説としての可能性があり、大きさは異なるものの五角形という双方の形状が似ている。

石製品

包含層 (第 23 図)

173 滑石製丸玉で直径 8mm、厚さ 3～4mm、孔径 2mm を測る。174 滑石製丸玉で直径 6mm、厚さ 1.5～2mm、孔径 2mm を測る。

小結

第 2 号竪穴建物出土の土師器甕 140 は布留式甕だが、体部が丸くなっており、古墳時代前期でもやや新しいものである。第 3 号竪穴建物も遺物の出土はないが、建物の構造から概ね同時期と考えられる。

第 1 号竪穴建物出土の須恵器杯蓋 145 は口径 14.6cm と大きく、口縁端部の段、内面に残る青海波のタタキメなど、半環瓶年案 (註 5) の IIIA に相当する。同様に須恵器杯身 147 と須恵器長脚 2 段スカシの高杯 148 も同時期のものである。当遺跡の南に位置する戸原寺田遺跡 (註 6) では、8m に近い溜状の遺構が検出され、澱治や紡績など生産関連が行われていた公的施設、居宅関連などの可能性が示唆される。開始期は 6 世紀中頃の IIIA 期で韓半島関連の土器類も得られている

が、当該時期の寺田遺跡を含む広範な遺跡範囲の北側境界付近のポイントとして重要である。

古墳は少ない資料ながら玄室内床面や石材抜き取り穴から得られた杯身 151 は高さより受部から立ち上りの形状や高きなど IIIB に位置づけられよう。また、杯蓋 150 や高杯 152、墓室や溝内から得られている杯蓋 154・156、杯身 158 も同時期の所産と考えられる。しかし、杯蓋 155 や杯身 159 はやや新しく IVA になることから古墳の時期を追跡も含め 6 世後半～7 世紀初頭頃と考えたい。

溝状遺構の時期は、須恵器杯蓋 161 は口径 12.6cm と小さく低平で天井部のヘラケズリも粗略である。須恵器杯蓋の 164・165 はやはり口径が 11cm と小さく立ち上り高も 7～8mm で低い。これら 3 点は IVB に相当しよう。しかし、須恵器杯蓋 162 は口唇端部に段が残る天井部と口縁部の境に沈線が見える。須恵器横瓶 167、遡 168、提振 169、170 は何れも IIIB～IVA 当りに位置づけられよう。また、須恵器椀で金属器を模倣した 171 は高台付と考えられ、底部付近には明確な後縁が見られる点は IVB～V あたりか。遺構の性質上新旧の遺物が混在するが、構築時期を IVB～V と捉え、7 世紀前半頃に位置づけられよう。

古墳は追送期を含め 6 世紀後半～7 世紀初頭、溝状遺構は 7 世紀前半頃と考えられることから両者の時期差は数十年以内であろう。仮に幅 2m ほどの溝状遺構を構築するとすれば、通常、有力層の奥津城である古墳は迂回する対象で、せいぜい古墳の周溝を部分的に利用するくらいであろう。そして、古墳の古墳利用期間からわずか数十年で墳丘や石室の破壊に及ぶとは考えづらい。遺構の項で記したが、当溝状遺構は単なる溝とは異なる道路状遺構北東側の側溝であり、もう一方の側溝は調査区外の西南側に埋れていると推測する。そのような側溝を備えた本格的な道路は、計画性をもった直線道路として構築されたと考えられ、現況からその方向を探ると北西北西から南南東に直線的に探るとすれば、北西北西側は現在の柏原町立大川小学校の校舎を抜け多々良川の左岸に到達する。また、南南東側は現在の伊賀集落の北東付近まで通じて伊賀堂付付近から寺田方面に抜ける。古墳は本格的な道路を構築する過程

において計画的に壊された可能性が高い。事実、古墳は墳丘や石室といった地上の構造物はもちろん、副葬品や敷石等も全て失われている状況と追葬も含め葬送の場として機能した時期からわずかに数十年であることから、おそらく、古墳は計画的に解体され別の場所に改葬された可能性が高いと想像している。古墳と調査遺構の関係は以上であるが、その背景についての考察は重要であろう。今後、調査範囲は南側へ広がることから、想定した道路状遺構の検出、古墳は群を成す可能性が高く、破壊された別の古墳の確認など課題は多い。

注

注5 大野城市教育委員会2008「戸原京跡群・総括報告書」大野城市文化財調査報告書第77集

注6 粕屋町教育委員会2017「戸原寺田跡」粕屋町文化財調査報告書第41集

古代・中世

遺構

第1号土坑 (第24図)

調査区北側に位置し、大部分を近代建築物の基礎に破壊される。東西約1.65m、南北約15cmを検出した。数センチの深さしかなく、大きく削平される。第1号土坑からは瓦器皿2点、白磁碗1点が出土した。この3点は伏せた状態で重なって出土しており、土坑墓の可能性が考えられる。

第2号土坑 (第24図)

調査区南端に位置し、調査区外へと伸びる。南北約75cm、東西約1.1m、深さ約5cmを測る。下層より縦80cm、横25cm、深さ10cmの方形土坑を検出した。2段階掘り込みで伏せた状態の完形土器が出土したことから、墳墓の可能性がある。

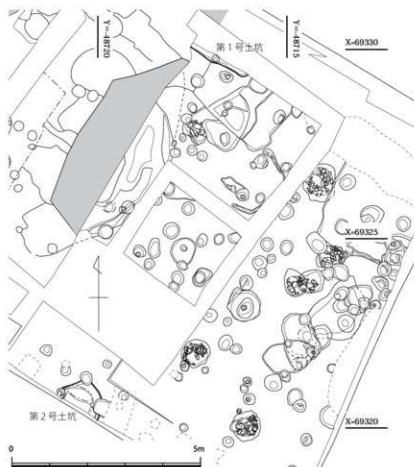
遺物

第1号土坑 (第25図)

175は内面に段を有する瓦器皿で口径10.7cm、底径6.3cm、器高2.1cmを測る。内面と外面体部は灰色を呈し、外面底部は灰白色を呈す。底部には板状圧痕が残り、内面にはわずかにミガキが確認できる。176は瓦器皿で口径10.2cm、底径7.6cm、器高2.2cmを測る。内外面ともに灰白色を呈す。ミガキは確認できない。177は白磁碗で口径17.25cm、器高7.55cm、高台径6.35cm、高台高1.5cmを測る。胎土は緻密で輪軸ともに灰白色を呈する。内面の上位に沈線が全体の4分の3程回り、底部には見込み線が巡る。沈線より下部には、11条単位の櫛目文を施す。

第2号土坑 (第25図)

178は土師器の椀で口径11.8cm、底径7.4cm、器高5.0cm、高台高1.3cmを測る。内面は橙色を呈し、底面底部と口辺の一部に黒色を呈す箇所が確認出来



第24図 中世土坑平面図(1/100)

る。外面は浅黄橙色を呈する。器厚は約2.5mm～3.5mmと全体に薄く、器形は体部が直線的に伸び、口辺部がわずかに外反する。口縁部は丸くナデ調整される。底部はへら切り後、高台を貼り付け、ナデ調整。

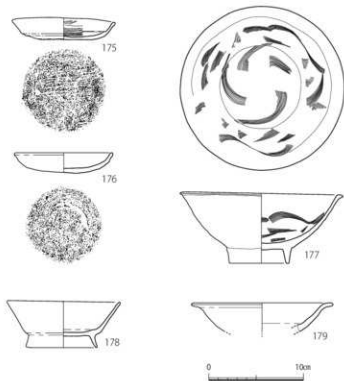
その他（第25図・第26図）

179はピットから出土した土師質の皿で復元口径15.0cm。色調は橙色を呈し、胎土は砂粒を多く含むが密である。内面と口縁部、体部外面の上部はナデ調整で、体部外面の下部は回転へら削り痕が残る。内面の底部と体部の境にはわずかに段があり、器厚はその段から薄くなる。体部は緩やかに内湾するが、口辺部で大きく外反し、ほぼ水平方向を向く。口縁部は、下部の回転へら削り痕より水平に見て、湾曲し波打つ。高台の有無は不明。このような器形は土師器に類例がなく、釉薬の調離も考えられるため、緑釉陶器の可能性も考えられる。180～192は包含層出土。180～183は土師器の小皿、180は口径10.0cm、底径7.1cm、器高1.42cmを測る。胎土は砂粒が多く、小石も混じる。焼成は良好。外面底部はへら切りで、外面体部及び内面は手持ちナデ調整。色調は内外面ともに橙色。181は復元口径8.6cm、底径7.0cm、器高1.4cm。内面は橙色を呈し、外面は浅黄橙色を呈す。調整は外面底部のへら切りを残し、内面から外面体部にかけてナデ調整。182は口径9.1cm、底径6.1cm、器高1.5cm。内外面ともに灰黄褐色。胎土はやや雑で、1mmほどの砂粒を多く含む。外面底部のへら切りを残し、内面から外面体部にかけてナデ調整。また、体部と底部の境をナデ調整により丸く仕上げた。183は口径9.75cm、底径7.5cm、器高1.4cm。内外面ともに橙色。胎土は粗く、1～4mmほどの砂粒を多く含む。赤褐色土が粒状に混じる。外面底部はへら切りを残し痕が残り、内外面ともに手持ちナデ調整。180～183の土師器は口径と器高より11世紀中頃から後半にかけてであろう。184、185は黒色土器B類の碗。184は底部を欠損しており、復元口径13.7cm。焼成は良好で、外面の一部にふい黄色がみられる。体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、口辺部が外反する。口縁部は強くヨコナデされ、内面はナデ、外面体部はへら削り、ミガキは確認できない。

外面底部付近には回転へら切り離しの痕が残る。185は口径14.8cm、高台高6.0cm、基部径5.1cm、器高6.4cm。体部は緩く内湾しながら立ち上がり、口辺部が外反する。内外面ともにへらミガキ調整が施され、口縁部は横位のナデ。184、185は10世紀末から11世紀初頭の所産であろう。186～192は陶磁器。186は形室・定窯系の白磁碗IV類1aで、残高5.4cm。玉緑は大きく肉厚で、内面の見込みは段状を呈す。胎土は粗く、気泡が多い。釉薬は黄色味を帯びた白色を呈し、細かなひび割れが生じている。下部には釉薬はかからない。187は白磁碗IV類で残高2.5cm。やや厚めの玉緑口縁で口唇部が三角形を成す。胎土はやや黄色味を帯び、気泡が見られる。軸は口唇部に厚く黄色を帯びた白色を呈す。188は白磁碗IV類で残高1.6cm。やや薄めの玉緑口縁で、胎土は良好。若干黒色粒子が含まれる。軸は淡緑白色で、若干貫入が見られる。189は白磁碗II類で残高2.9cm。やや厚みのある玉緑口縁で断面形は

三角形を呈す。胎土は若干気泡が含まれ、黒色粒子がまばらに見られる。軸は淡緑白色で薄めにかかり、若干気泡が混じる。また、貫入が見られる。体部は内湾気味である。190は白磁の碗もしくは皿で、皿ならII類か、残高3.1cm。口縁部は外反し内面に見込み線が見られる。軸は見込み線付近の外側までかかり、灰白色を呈す。一部に気泡状の孔が見られる。胎土は灰白色で大きな気泡が見られる。191は白磁碗の高台で、低い輪状である。内外は斜行し、底部外面を斜めに削る。胎土は一部に黒色粒子が混ざる。軸は淡灰色を帯びた白色で、体部外面の一部にかかる。192は越州窯系の青磁碗底部で、高台高は3.0cm。前面に釉薬がかかり、灰オリブ色を呈す。胎土は良好で灰色を呈し、内面と高台に重ね痕が残る。

中世・古代については出土遺物こそ少ないが、第1号土坑は12世紀中頃、第2号土坑は9世紀末から10世紀初頭の所産と考えられる。



第25図 第1号土坑、第2号土坑、ピット出土土器(1/4)

おわりに

今回の調査では、縄文時代後期初頭から前葉にかけての後期阿高系（坂の下・南福寺・出水）土器群と福田KI式を主とする磨消縄文系土器群に伴い、直径30cmほどの柱を約3m間隔で2本建て、それが1単位として機能する構築物が存在し、相前後して2基が建造された状況が明らかとなった。2本の柱が両脇に建つ光景は、鳥居の柱を思わせるが、柱を含めその上部がどのような構造であったかは不明である。しかしながら、何らかの理由により建て替えられたことも事実で、新たな構築に際し、古い方の柱を抜き取る行為が祭祀を伴って執り行われている状況が判明した。しかも、左右それぞれの柱は抜き取るまでは同じであるが、埋め戻す際のやり方が異なっており、2本で1単位でありながら、左右それぞれ異なる意味を示しており、興

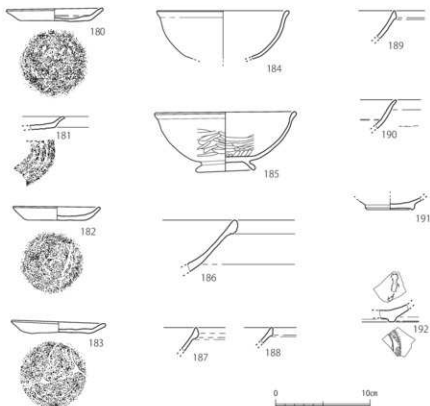
味深い。また、2本並びの正面が示す方位が春分・秋分・夏至・冬至といった太陽の軌道を意識した構築物の可能性もあり、類型として取り上げた福岡県福岡市東区名子遺跡の「石入り土坑」の存在とも考え合わせると今後の展開に期待される。いずれにしても類型の増加を待って考察すべき重要課題であろう。

次に、6世紀後半期に築造された古墳が追葬終了から数十年で完全消滅した状況は、7世紀前半代に規模こそ不明であるが多々良川左岸の一角を起点とする側溝を持った直線道路の建設に伴い計画的に破壊された状況が見えてきた。古墳は墳丘や石室といった地上の構築物や副葬品、敷石等までが全て失われており、完全に消滅したことが分かる。一見さまざまな破壊行為に見えるが、古墳築造後の短期間に全てが跡形もなくなる状況と計画道路の建設状況から察するに、古墳は完全破壊ではなく1基ごと解体して別の場所に移築して被葬者を改葬したと

考える。今後、道路状遺構の大半が埋められている調査区の南側が調査対象地区となるため、調査次第では想像や予想が大きく進展する可能性を秘めており、期待したい。

中世の遺構等に関しては、わずかばかりの遺構を検出した。遺構状況・出土遺物から墳墓の可能性が想定される。戸原伊賀遺跡の南約150mの位置に開基1200年と伝承の残る伊賀薬師堂（東願寺）が所在する。延暦二十四（805）年に最澄が薬師如来像を安置したと山本院縁起書で伝承されている。開基当初は講堂、僧坊を備えた大伽藍であったと伝えられ、今回の調査で青磁や白磁などの輸入陶磁器なども検出しており、伊賀薬師堂との関連も想起される。

文末ではありますが福岡市教育委員会小池史哲、九州大学大学院人文科学研究科・准教授辻田淳一郎両先生には貴重なご意見、ご教示等を賜りましたこと記して感謝申し上げます。



第26図 包含層出土土器（1/4）

図版



竪穴建物（縄文時代）石組み戸（北から）



調査前全景(南西から)



第1号土坑(縄文時代)(北から)



第2号土坑(縄文時代)調査状況(北西から)



第2号土坑(縄文時代)土層(北西西から)



第3号土坑(縄文時代)土層(南西から)



第4号土坑(縄文時代)土層(南西から)



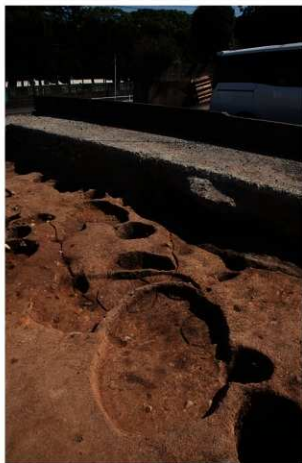
第3号土坑(縄文時代)土層(南西から)



第4号土坑(縄文時代)土層(南西から)



第5号・第6号(手前)第8号土坑(奥)(縄文時代)(南西から)



第10号・第11号土坑(縄文時代)(西から)



調査後全景 (南東から)



古墳墓道・奥道 (北から)



第21図a-a'土割 (北西から)



第21図b-b' (南から)



溝伏遺構上層 (北西6-5)



溝伏遺構全景 (北西6-5)



溝伏遺構全景 (南東6-5)



25



94



39



左 121 右 129



90



125



左 142 右 144



143



145



149



147



177



148



178

報告書抄録

| ふりがな | とばらいがいせきたいいちてん | | | | | | | |
|------------|--|---------------------|-----------------|----------------------------------|-------------------------------------|------------------------------|--------|------|
| 書名 | 戸原伊賀遺跡第1地点 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 粕屋町文化財調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第46集 | | | | | | | |
| 編著者名 | 福島日出海、朝原泰介 | | | | | | | |
| 編集機関 | 粕屋町教育委員会 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒811-2314 福岡県糟屋郡粕屋町若宮一丁目1番1号 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 2019年3月29日 | | | | | | | |
| 所収遺跡名 | 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 戸原伊賀遺跡第1地点 | 福岡県糟屋郡粕屋町 戸原東二丁目40-2地 | 403491 | 280238 | 33° 27' 26" | 130° 28' 29" | 2017.8.28 ～ 2017.11.29 | 146.4㎡ | 共同住宅 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 | | | |
| 戸原伊賀遺跡第1地点 | 集落、古墳 | 縄文時代、古墳時代、奈良時代、平安時代 | 竪穴建物、土坑、古墳、溝状遺構 | 縄文土器、土偶、土師器、須恵器、黒色土器、青磁、白磁、瓦器、石器 | 縄文時代後期前葉の柱穴状の土坑群、同時期の土偶・古墳を破壊した溝状遺構 | | | |
| 要約 | <p>戸原伊賀遺跡第1地点では縄文時代後期前葉の後期阿高系及び磨消縄文系土器群が共存するなか、福岡県内最古級の土偶の可能性のある遺物も出土した。遺構は径30cm程の柱礎を伴う土坑4基が確認され、柱2本を一単位とする祭祀遺構の存在が推定された。また、7世紀の道路状遺構の側溝部分による6世紀後半の円墳全壊状況が確認されたが、これは直線道路の新設に伴う計画路線内に位置する古墳を移転改葬した事例と想定された。</p> | | | | | | | |

戸原伊賀遺跡第1地点 粕屋町文化財調査報告書第46集

平成31年3月29日 発行

発行 粕屋町教育委員会
〒811-2314 福岡県糟屋郡粕屋町若宮一丁目1番1号（粕屋町立歴史資料館）
TEL: 092-939-2984 FAX: 092-938-0733

印刷・製本 株式会社三光
〒812-0015 福岡県福岡市博多区山王一丁目14-4
TEL: 092-475-6271 FAX: 092-475-6274